

【氏名】 秦泉寺 友紀

【所属大学院】（助成決定時） 東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】

イタリア・ナショナリズムにおける地域的共同性の位相
——1910～30年代の「民衆祭」の生成と変容

【研究の目的】

本研究は、1910～30年代、イタリアの全国各地（特に北・中部）で行われた「民衆祭」（*festa popolare*）の生成と変容の分析を通して、イタリア・ナショナリズムにおける地域的共同性の位相を明らかにすることを目的とした。民衆祭とは、コムーネ（日本の市町村に相当）で開催された祭りの総称で、特産物を振舞うもの、「歴史的」意匠をこらしたパレードを柱とするものなど多岐にわたり、多くの場合、行政や国民ファシスト党の後援のもと行われた。一般的な了解においてもナショナリズム研究においても、イタリアは従来、地域的アイデンティティが強固であるとされ、さらにそれゆえにナショナリズムの「失敗例」をなすことになっているとされてきた。本研究は民衆祭の生成と変容の過程を分析し、イタリアにおける地域的なアイデンティティとナショナルなアイデンティティとの関係について、その具体的・現実的様相の一端を浮かび上がらせることで、こうした見解の妥当性をめぐっての基礎的な検討を行った。

【研究の内容・方法】

本研究が具体的に検証の対象としたのは、民衆祭の1910年代の生成、1920年代にかけてのその展開、1930年代のその転換という3つの局面である。

第一に民衆祭の生成の局面に関しては、イタリアでは1910年代にその歩みを始めた民俗学が、その背景として関わりを有していたことを跡付けた。「アンブロジアーニ」等の雑誌で展開した初期のイタリア民俗学における地方をめぐる議論を分析し、イタリアというネーションに還元されない諸地域の「独自の文化」が「発掘」すべき対象として見出されるなか、諸地域で個別に行われていた既存の（当時、時に廃れつつあった）祭りが、その現れとしての価値ある「保存」すべき「民衆祭」として位置づけられていったことを明らかにした。

第二に民衆祭の展開の局面に関しては、第一次世界大戦後のイタリアにおけるマスレジャーの興隆という要素に着目し、それを牽引した民間団体「ツーリング・クラブ・イタリアーノ」の活動を取り上げて検証した。これを通して、諸地域の祭りが当該地域の豊かな個性の表出である「民衆祭」として有力な観光資源と位置づけられ、その見物が手の届くレジャーとして盛んに取り上げられていたこと、その文脈においてこの時期から行政による支援もしばしば行われ、民衆祭がマスレジャーの一環として急速な拡大を遂げたことを描き出した。

第三に民衆祭の転換の局面に関しては、1930年代のファシスト体制による余暇活動への参入——民

衆祭はその重要な足がかりとされた——がもたらした影響について、体制の余暇事業団「全国ドーボラヴォーロ事業団」の活動における民衆祭の評価、位置づけに照準し検討した。従来民衆祭は、それが個々の地域の独自色の表出である点に価値がおかれていた。それに対し、ファシズム下ではその捉え方は、イタリアの豊饒さの一構成要素という二義的なものとなり、民衆祭がイタリア・ネーションの祭りとして位置づけられるに至ったことを示した。

【結論・考察】

本研究は、イタリアにおける民衆祭の生成と変容を分析することを通して、地域的な共同性がナショナルな共同性に埋め込まれた存在として意味づけられると同時に、ナショナルな共同性が(種々の)地域的な共同性のうちに分節化されることでその豊かな現実性を確保しうる存在として意味づけられる、そうしたプロセスの一端を析出した。諸地域で行われていた祭りが各々の個別性にもかかわらず、イタリアの「民衆祭」というある総体として見出されると同時に、その個別性に価値がおかれたのは、まさにそのようなナショナルな共同性と地域的共同性との関係を示す。本研究による検証からは、少なくともイタリアの事例において、地域的なアイデンティティとナショナルなそれは排他的であったわけではなく、むしろ互いの存立を支え合う要素となっていたことが浮かび上がった。このような両者の共軛関係は、ナショナリズムの「失敗例」をなすという冒頭で触れたイタリアをめぐる理解に一石を投じることにしよう。